

区分	（上段）氏名 （下段）所属	所信表明
全国区選出理事	<p style="text-align: center;">ササキ タケシ <b>佐々木 毅</b></p>	<p>この度全国区理事に立候補いたしました東京大学次世代病事情報連携学講座 佐々木毅と申します。これまで3期全国区理事として、主として病理学会の「渉外担当役」として、立法院や厚労省、文科省、総務省、経産省など行政府、日本医師会との橋渡し役を務めてまいりました。社会保険委員長としての診療報酬セミナーの開催や、分子病理専門医制度運営委員長として分子病理専門医制度の運営、希少がん診断のための病理医育成事業では厚労省との予算獲得交渉から事業の実施などに関わってまいりました。これまでの経験を生かしながら、引き続き日本病理学会の渉外担当役として、病理学会事務局の支援の下、事務局と一体となって病理学会を盛り上げたいと存じます。加えて今後の2年間は、特に自分の職務に関して、後継の育成や省庁人脈の引継ぎも積極的に行う所存です。ご支援のほど何卒よろしく願い申し上げます。</p>
	<p>東京大学大学院医学系研究科 次世代病事情報連携学講座</p>	
	<p style="text-align: center;">フルカワ トオル <b>古川 徹</b></p>	<p>私は1990年に日本病理学会に入会し、一学会員として病理学研究、教育、診療に邁進して参りました。令和4,5年度に東北支部長に選出され、地方区選出理事として活動する機会を頂き、この間、東北支部長としては年2回の開催であった東北支部学術集会を年3回とし、また、東北新潟病理検討会50周年記念事業の企画等を行いました。病理学会役員としては倫理委員会委員長を拝命し、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針及び個人情報保護法に対応する形での日本病理学会学術集会演題応募時の倫理規定の制定等を行いました。また、2025年春の日本病理学会総会会長を拝命し、鋭意準備に取り組んでいるところです。これら活動を通じて、病理学会の発展にさらに貢献したいという思いが募り、今般、全国区選出理事に立候補することといたしました。病理学会をさらに魅力あるものにするべく努力する所存です。何卒よろしく願いいたします。</p>
	<p>東北大学大学院医学系研究科病態病理学分野</p>	
	<p style="text-align: center;">タナカ シンヤ <b>田中 伸哉</b></p>	<p>私はこれまで4期8年理事として学会運営に携わって参りました。病理医を取り巻く環境はコロナ禍を乗り越え、AIの進歩を含むDX社会の展開の中、変化し続けています。ゲノム医療が発展する中での病理医の役割の明確化、分子病理専門医の育成、医療安全の推進など重要課題に取り組んで参りました。今後はきめ細かい診療報酬の改訂、若手リクルート、デジタルパソロジーの導入なども大切な課題です。Pathology International誌の更なる発展も重要です。これらの諸課題に取り組み、病理学が輝き続けるために重要なことは、臨床病理と実験病理のバランスのとれた発展と考えています。若手医師が一人でも多く病理医を目指すように、病理診断の魅力・醍醐味を伝えていきます。また病理学教室での基礎研究が他分野とは一味違う魅力があることを啓蒙します。診断と研究がシンクロナイズして更に大きく発展する病理学会を目指します。</p>
	<p>北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教室</p>	
	<p style="text-align: center;">トヨクニ シンヤ <b>豊國 伸哉</b></p>	<p>この度、日本病理学会全国区理事選挙に再度立候補させていただきました。私は医学部卒業・初期臨床研修の後、36年間に渡り病理学教室に所属し、病理学の教育・研究・診断業務に日々携わってまいりました。その間、大きな変遷がありましたが、そのコアは「基礎研究の成果が病理診断に還元され、諸先輩方の努力により医療における病理専門医の立場が確立され、病理専門医が治療法選択に深く関わるようになったこと」と理解しております。病理学において、基礎研究と病理診断はまさに車の両輪であり、基礎研究の発展なしに病理診断の発展はありません。さらに、基礎研究成果の社会還元過程においても、病理研究医の重要性は増すばかりです。この解決には、医学部学生のうちから病理学に多くの若者を引きつけることが極めて重要です。私はこれまでの経験を十分に活かしながら、特に学術とリクルートを通じて日本病理学会の発展のために全力を尽くす所存です。</p>
	<p>名古屋大学大学院医学系研究科 病理病態学講座生体反応病理学</p>	
	<p style="text-align: center;">オダ ヨシナオ <b>小田 義直</b></p>	<p>7年前から副理事長、1年前からは理事長として学会における様々な活動を行ってきました。今後も以下の3点に重点を置きその実現に邁進してゆきます。リサーチマインドを持つ病理医育成:様々な学会の学術活動活性化に貢献し2020年に学術発表の場である日本病理学会学術総会をお世話させていただきました。「病理学者」の面を併せ持つ病理医育成に努めます。国際指向性に飛んだ病理医育成:日英・日独・日欧病理学会交流事業、アジア諸国との交流をさらに充実させ若手病理医の目を海外に向け、日本の病理学を積極的に海外へ発信することを目指します。病理専門医数の増大:広報活動を通じて病理学会の活動を内外に積極的に発信し多くの専攻医を確保するよう努めます。病理業務におけるワークライフバランスを確保し、Web教育の積極的な導入も目指します。病理学会活動を魅力あるものに改革を進め、次世代の病理専門医を増やす努力を継続いたします。</p>
	<p>九州大学大学院医学研究院形態機能病理学</p>	
	<p style="text-align: center;">イトウ トモオ <b>伊藤 智雄</b></p>	<p>私はこれまで、病理学会理事としては主に情報発信の領域を中心に活動して参りました。HANSHIN健康メッセ、医学会総会など、これまでになく大規模な市民向け情報発信を実現しました。その他、公式市民向け動画のYouTube発信、パンフレット作成なども主導し、さらには春の総会における親子向け企画の新規立案など多彩な提案・企画実現をしてきております。「病理医」の知名度を上げ、ひいては社会的地位を高めるためには極めて重要な活動と自負しております。また、学会外活動とはなりますが、「全国大学病院病理診断科・病理部会議」の議長を務めており、病理を取り巻く諸問題や将来展望を取り纏め、「将来VISION2023」の作成に至りました。これまでの経験を十分に活かし、病理のさらなる明るい将来に向けて粉骨砕身の覚悟で取り組んでゆく所存です。ご支援を宜しく願い申し上げます。</p>
	<p>神戸大学医学部附属病院病理部</p>	
	<p style="text-align: center;">モリイ エイイチ <b>森井 英一</b></p>	<p>病理学は医学の根幹をなし、医療の様々な局面で病理診断医の責務がますます重要視されています。私はこれまで、医療業務委員長、ガイドライン委員長、そして直近6年は病理専門医制度運営委員長として各方面の先生方や関連学会と共に働きやすい体制構築に努めてまいりました。専門医機構とも種々の折衝を行い、機構の求める質の担保を図りながらも病理医独特の事情を鑑みた研修内容の充実や専門医試験受験要件の緩和などを実現してまいりました。ワークライフバランスを保ちながらいかに病理診断を行なうか解決すべき問題が山積しています。再選させていただけた場合には、これらの取り組みに一層汗を流す所存です。病理医は病態を日々観察し研究の着想を得やすい環境にいます。病理診断とともに病理研究の推進、特に活力ある若手研究者の育成のため、みんな元気に働ける環境を作りたいと強く思っております。何卒ご支援賜りますようお願い申し上げます。</p>
	<p>大阪大学大学院医学系研究科 病態病理学・病理診断科</p>	
	<p style="text-align: center;">カナイ ヤエ <b>金井 弥栄</b></p>	<p>ゲノム医療においてゲノム情報を診療に結び付ける病理診断は重要性を増し、空間オミックス解析や人工知能による疾患モデル構築研究にも、病理医の形態認識能力が求められます。現在は、診療・研究の広汎な領域で病理医が一層のプレゼンスを示す好機です。病理診断とデータ駆動型研究における私の経験を変革の時期に活かすべく、この2年間拡大大常任理事として活動させて頂きました。厚生労働省に対しゲノム医療に関する本学会の主張を明確にし、ガイドライン・規程等の改訂と迅速な情報提供に努め、研究基盤構築における病理医の役割について講習等実施して参りました。他方では、基礎研究における病理の重要性の学会外への発信と、病理学研究の魅力を研修医等に伝える活動について、道半ばです。学際的疾患研究における病理学の貢献を産学官にアピールして、研究推進に努め、後進の育成にも活かすべく、再度機会を頂戴致したく、何卒宜しく願い申し上げます。</p>
	<p>慶應義塾大学医学部病理学教室</p>	
	<p style="text-align: center;">ヤタベ ヤスシ <b>谷田部 恭</b></p>	<p>医療、特にがん診療が個別化医療に移行し、病理医に新たな役割が課せられるとともに、形態診断の重要性は変わることがなく、結果として病理医が果たすべき業務は増加・多様化しています。私は大学を離れて25年間、一貫して病院に所属し、診断病理医として勤めてきました。この中で、多くの病院が大学とは異なる力学によって成りたっていること、そして臨床現場が保険行政によって大きく影響を受けることを学びました。前回に引き続き全国区の理事に立候補させていただきましたのは、これまでの経験を生かし、病理医を取り巻く環境の整備に、病院での診断病理医の視点を持って貢献したいと考えたためです。診療での免疫染色やコンパニオン診断・遺伝子解析における諸問題の解決や診断困難例に対する制度の拡充をこれまで以上に組みたいと考えています。診断に係る病理医の意見を理事会により反映させるべく、どうぞご支援をお願い申し上げます。</p>
	<p>国立がん研究センター中央病院病理診断科</p>	
	<p style="text-align: center;">オオハシ ケンイチ <b>大橋 健一</b></p>	<p>この度日本病理学会全国区選出理事に立候補させて頂きました。前期は理事として財務委員会委員長、企画委員長等を担当しました。財務委員会では健全な財務運営に務め、企画委員会ではダイバーシティ問題、理事会・委員会の活性化に務めてきました。現在病理学会においては様々な問題がありますが、以下の問題に重点的に取り組みたいと思います。1. 学会の財務運営の健全化。会員数が伸び悩む中、諸物価の高騰で黒字運営が困難な状況があります。2. 若手病理医、女性の活用、後継育成。病理学会にとって逼迫した問題であると思います。3. 病理医による研究活動の活性化。診断病理医の研究活動に対する支援。4. 衛生検査所に関係する諸問題の解決、病理医開業の促進、定年後も安定した勤務状況の確保。会員の皆様の協力をいただきながら諸問題に取り組み、病理学会全体の発展に力を注ぐ所存ですので、ご支援の程よろしく申し上げます。</p>
	<p>東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 人体病理学分野</p>	
	<p style="text-align: center;">ツツキ トヨノリ <b>都築 豊徳</b></p>	<p>近年の医学の目覚ましい進歩には病理が大きく寄与しており、更なる貢献が期待されています。その一方、恒常的な人員不足と日常業務の増加及び研究へ要求結果が求められています。私は現在まで人体病理学に関する業務、若手人材育成、研究及び国際関係に携わってきました。また対外的にはWHO 第5版のstanding memberとして日本人病理医の執筆に尽力してきました。病理学の更なる発展には、人体病理と実験病理との融合を進め、積極的に海外の病理学会あるいは病理医と交流することを通じて、診断技能の向上のみならず、リサーチマインド及び国際感覚を持った病理医の育成が必要と考えています。更には、人工知能等を有効活用してワークライフバランスを充実させ、労働環境を改善したいと思います。これにより、次世代にとっても病理専門医が魅力ある職業になるよう努力します。病理学会員の皆様のご支援をお願い申し上げます。</p>
	<p>愛知医科大学医学部病理診断学講座</p>	
	<p style="text-align: center;">ウシク テツオ <b>牛久 哲男</b></p>	<p>病理学会には様々な役割がありますが、私が最も貢献したいのは病理医の育成・教育活動です。病理医不足が叫ばれ、必要な知識が増加し続ける中、個人の努力のみで十分な経験を積み知識をアップデートし続けることは難しくなりつつあり、学会を挙げて効率的な病理医教育をサポートする体制強化に尽力したい所存です。診断能力の向上は病理医の喜びであり、臨床医から信頼され、医療の中でその存在意義を高めることにつながります。そうした魅力ある病理医の姿を示すことで、医学生や研修医はやりがいや重要性を感じ、病理医を目指す最大のモチベーションとなります。診断の強化は研究の強化に直結し、病理医の強みを生かした魅力ある研究が益々発展することを期待しています。今後はデジタル化・遠隔診断の普及やAI利活用が見込まれ、病理医の負担を軽減し持続可能な次世代病理診断の構築も重要課題です。会員の皆様のご支援を何卒よろしく願い申し上げます。</p>
	<p>東京大学大学院医学系研究科 人体病理学・病理診断学分野</p>	